

## 山梨とゆかりのある浮世絵師たち

残存する「幕絵」からは、江戸の浮世絵師と甲府の人々との繋がりを見いだすことができるほか、山梨を舞台とした浮世絵師たちの多くの足跡を垣間見ることができている。例えば、芳年の師である歌川国芳は、甲府にある菓子屋、升屋の主人と親交があり、升屋の菓子袋のデザインなどを手掛けたことがわかっている。また、芳年の弟子のひとりである中澤年章は、甲斐国巨摩郡布施村(現中央市)の生まれで、師から受け継いだ画技を活かして、肉筆画(浮世絵師が絹や紙に直接描いた一点ものの絵画)を中心とする作例を県内に残した。

このような山梨における浮世絵研究は、山梨日日新聞社長であり、郷土史家であった野口二郎から始まった。昭和十一年(一九三六)、浮世絵研究家である榎崎宗重が浮世絵調査のため甲府を訪れたが、その際に案内したのが野口であった。彼ら二人の出会いが山梨における浮世絵研究を飛躍的に進め、県内に残る浮世絵を中心とした展覧会なども開催されるようになったのである。

しかし、山梨における浮世絵師たちの活動については、まだわかっていないことも多い。今後も、さらに研究を進めていく必要があるだろう。

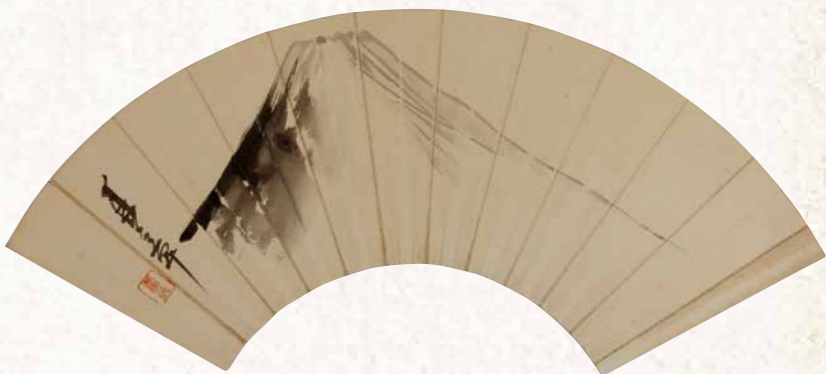


菓子袋裏面に捺された升屋の印



「甲州善光寺境内之図 初午」 三代歌川豊国筆 弘化4~嘉永5年(1847~52)

善光寺(甲府市)の境内を背景とした、浮世絵師の三代歌川豊国による大判錦絵3枚続の作品。子どもを連れた女性や虚無僧の姿が描かれている。三代豊国は甲府の菓子屋、升屋とも親交があったと考えられている。山梨とゆかりがある浮世絵師のひとりである。



「菓子袋」(「升太の広告集」所収)

歌川国芳筆

江戸時代

全体が朱色で仕上げられ、疱瘡絵の意味合いが含まれている。赤色には、疫病を除く効果があると考えられた。そのため、なかに軽焼きなどを入れ、疱瘡患者のもとに見舞いとして参したと考えられる。国芳の名前が確認できるほか、裏面には升屋の印判が捺されている。

「扇面富岳図」 中澤年章筆 明治時代末~大正時代初期

芳年の弟子で山梨出身の浮世絵師である中澤年章による富士図で、甲府の豪商大木家に伝来したものである。大木家には初代広重が描いた当主夫妻の肖像画なども残されており、大木家が絵師らのパトロンとして作画活動に広く携わっていたことが推測される。

主要参考文献

- ◆榎崎宗重「浮世絵甲斐土産-絵師所伝に関する研究-」(『浮世絵界』2巻1号、浮世絵同好会、1937年)
- ◆野口二郎「峡中浮世絵考」山梨郷土研究会、1953年
- ◆瀬木慎一「新発見・芳年の幔幕」(『芸術新潮』27巻3号、新潮社、1976年)
- ◆調査報告書『山梨県立博物館 調査・研究報告3 歌川広重の甲州日記と甲府道祖神祭』山梨県立博物館、2008年

山梨県立博物館 シンボル展

## 帰ってきた芳年の道祖神祭幕絵

編集・発行 **山梨県立博物館**  
Yamanashi Prefectural Museum

〒406-0801 山梨県笛吹市御坂町成田1501-1  
電話 055-261-2631

※月岡芳年の「幕絵」の修理は、公益財団法人 出光美術館の美術品修復事業助成を受け実施しました。

山梨県立博物館 シンボル展

## 帰ってきた芳年の道祖神祭幕絵

往時の姿 今蘇る

令和6年  
1月20日(土)  
~2月19日(月)

甲府城下の道祖神祭りと「幕絵」  
甲府城下では小正月になると、「当国一大盛事」と称されるほど、盛大に道祖神祭りがおこなわれた。とりわけ江戸時代後期には、二枚あたり縦約二メートル、横約十メートルにもなる大きな「幕絵」数百枚が表通りを飾り、大変な華やかさであったという。

「幕絵」に描かれた絵は、町によってテーマが異なっており、題材となった東海道の宿場や物語の場面などが、当時有名だった江戸や京都の絵師によって描かれた。つまり、甲府城下町においては、町ごとに数十枚の連作の「幕絵」を所有していたと考えられている。それぞれの町では「幕世話人」となった商家の主人が、絵師らを甲府に呼び寄せ、制作費や滞在費を負担した上で制作させたということがある。

しかし、明治五年(一八七二)、「道祖神祭礼取締」の通達が出され、甲府道祖神祭りは突然廃止となった。多くの「幕絵」は転売、転用されるなどして処分され、現存が確認できるものは次の三枚だけである。風景画を得意とした人気浮世絵師、初代歌川広重による「甲府道祖神祭幕絵 東都名所 目黒不動之瀧」、初代広重の「幕絵」が破損したことから、二代広重が補筆をおこ



「甲州道中記」(写本)(部分)  
大正4年(1915) 原本:慶応2年(1866)

江戸時代の終わりに、甲斐国を旅したという安藤助五郎による記録で、甲府道祖神祭りの様子が挿絵入りで紹介されている。神木状の道祖神祭りの飾り物の隣に、「幕絵」が飾られた様子が描かれている。



「甲府道祖神祭幕絵 東都名所 目黒不動之瀧」 歌川広重筆 天保12年(1841) (山梨県指定文化財)

広重が甲府緑町一丁目(現若松町)の人々に招かれ描いた「幕絵」。緑町が選んだ画題は「東都名所」であり、当初は同画題で20枚以上の連作として描かれたと考えられている。



「甲府道祖神祭幕絵 東都名所 洲崎汐干狩」 二代歌川広重筆 元治元年(1864)頃 (山梨県指定文化財)

初代広重が緑町一丁目のために描いた「幕絵」が破損したため、二代広重が元治元年(1864)頃に補って描いたものである。吊り手に「すさき万定彦彦」などの墨書があることから、この「幕絵」の管理者が岩崎彦左衛門であったことがわかる。

一柳齋芳年



●～●は「物見の穴」の場所を示している。

「甲府道祖神祭幕絵 太閤記 佐久間盛政羽柴秀吉を狙ふ」  
月岡芳年筆  
元治元年(1864)頃

柳町四丁目を飾った芳年の「幕絵」。『峡中浮世絵考』(野口二郎著)には、芳年は武者絵を得意とするため、歴史物を描かせたほうがよいだろう、という話が町の顔役たちの間であがったとの記述がある。このことから、武者が多く登場する「太閤記」が題材として選ばれたと考えられる。



物見の穴●の部分  
左図が閉じた状態で、右図が開いたところ。  
全部で3ヶ所の「物見の穴」が確認された。



顕微鏡写真②の拡大図  
甲冑の緑色の部分を拡大したもので、「花緑青」を使用した可能性が指摘された。



顕微鏡写真①の拡大図  
秀吉の兜の緒の部分拡大したもので、調査の結果、「朱」「鉛丹」といった顔料が使用されたと考えられる。



制作当初のものと思しき一番右上の乳  
「三拾」の文字が記されている。芳年の「幕絵」が飾られていた場所、もしくは制作された「幕絵」の数を表していると考えられる。



修理の様子  
本体表面の汚れや堆積した埃を、刷毛で払いとる作業。「幕絵」の上部より下部のほうに土埃や泥はねによる汚れが多くあったことが、修理の過程で判明した。「幕絵」が屋外で使用されたことを物語っている。

数奇な運命をたどった芳年の「幕絵」  
芳年が制作した当時は、この「幕絵」が最も新しくきれいであったとの証言が、野口二郎の『峡中浮世絵考』に残されている。また、広重研究の第一人者である内田実の著書『広重』には、「幕の内最も著名シテ今尚人ノ喧伝スルハ北斎富士ノ巻狩、初代広重五十三次ニ二代広重江戸名所、芳年太閤記等ナリ」との記述があり、芳年の「幕絵」の出来の良さがうかがえる。  
芳年の「幕絵」は甲府道祖神祭りが廃止となって以降、甲州文庫の蒐集で知られる功刀亀内の所有となった。ところが、昭和二十八年(一九五三)、当時の県立図書館で開かれた第二回「峡中浮世絵展」で展示された後、行方がわからなくなった。美術評論家の瀬木慎一によって、この「幕絵」がとある古書業者のもとにあることが明らかになったのは、それから約二十年後のことである。  
その後個人の所蔵となった芳年の「幕絵」は、令和元年(二〇一九)に当館が所蔵するところとなった。画面からみざる迫力は、描かれてから一五〇年以上たった今も変わらず、修理を経て、道祖神祭りがおこなわれていた当時は鮮やかによみがえるようである。

また、今回の修理では「幕絵」に用いられた絵具の分析もおこなった。その結果、緑色の色材として「花緑青」という顔料が使われた可能性が指摘された。この顔料は、十九世紀初頭にフランスで生産が始まり、その後ドイツで工業化された人工顔料である。日本には江戸時代に輸入され、日本画の顔料として用いたようである。芳年の「幕絵」は色味が強く、くっきりとした色が出る顔料が使われていたようだが、祭りで飾られた際は、その鮮やかな色彩が甲府の人々の目を釘付けにしたことだろう。

さらに他の「幕絵」と同様、「物見の穴」が開けられていたこともわかった。戦場の様子を確認するための穴である「物見の穴」があるということや、五段に重ねて縫われていたという点は、戦場において武士たちが己の陣地に張り巡らせた陣幕の様式と合致する。初代広重・二代広重の「幕絵」にも見られるこの特徴が、芳年の「幕絵」にも確認できたことは、甲府道祖神祭りの「幕絵」が、陣幕の作法にならって作成されたことを改めて裏付けることになった。

修理からわかったこと  
芳年の「幕絵」も初代広重・二代広重の「幕絵」と同様、横長の麻布が五段に重ねられ、縫い合わされている。しかし、今回おこなわれた修理の過程で、上三段と下二段とは、異なる麻布が使われていることがわかった。生地の違いは故意に変えられたというよりも、同じ麻布から一枚の幕絵を作成するのに十分な長さを取ることができなかったために、二種類の麻布を用いたためではないかと考えられる。

芳年の甲府道祖神祭幕絵  
月岡芳年は、幕末から明治にかけて活躍した浮世絵師のひとりである。武者絵や美人画、歴史画など幅広い画題の作品を手掛け、当代一流の絵師としてその名を馳せた。  
芳年は、山梨を少なくとも二度訪れている。そのうち元治元年(一八六四)頃の来訪が、甲府道祖神祭りの「幕絵」を描くためだと考えられている。柳町四丁目(現甲府市中央)を飾った芳年の「幕絵」の題材は「太閤記」であり、当館で所蔵しているものも、羽柴秀吉と、柴田勝家の甥である佐久間盛政が対峙するシーンが、見事な筆遣いで表されている。